
酸性恋愛雨

佐藤筍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

酸性恋愛雨

【Nコード】

N4872S

【作者名】

佐藤筍

【あらすじ】

私の恋は、雨に始まり雨に終わる。一つの恋が終わったその日も、雨が降っていた。

狙った相手は逃がさない。極めつけのストーカーである私は、新たな恋の相手を見つけ早速ストーキングを開始！…しただけだ。

いとしの彼は同じ学校の同じクラスの生徒で、しかも外見からは想像つかない奇人変人ある意味魔人。私の『アタック』も意に介さない彼にますます惚れた！ぜったい目に物見せてくれるわ！

目じりから熱いものがこぼれ落ちた。今はまだぬぐい取る気になれなくて、視界をにじませたままきびすを返した。

そしてそのまま、

「……………」

間近に立っていた人物に気付かず、顔面からつつこんでしまった。一歩引いてみると、真つ黒なコートを着た背の高い男がそこにいた。パツと見て年齢は高3といったところか。右手にごく普通の安っぽいビニール傘を差して、左手にごく普通の通学鞆をぶら下げている。

「あ……………すみません……………」

無表情で見つめられて、気まぎれになった私は立ち去ろうとした。

この姿はどう見ても不審者だ。こんな夜中に、若い女が雨の中をずぶぬれで、目を真つ赤にして……………。

「どこか、怪我は？」

横をすり抜けるとき、ごく普通の学生風の男に声をかけられて、思わず足を止めた。

「大丈夫、です」

ぶつかつたせいで鼻がちよつと痛かつたが、こんなの大したことじゃない。

胸を締め付けるようなキリキリとした痛みのほうがよっぽどどうにかしてほしいものだ。だがこんなもの、会つたばかりの赤の他人に治せるわけがない。

「……………」

突然、顔の横に黒いものがぬつと突き出されてびっくりした。折りたたみ傘だった。通学鞆の中にも入っていたのだろう。

おっかなびっくり受け取る。しかし彼は私をじつと見つめるだけで、それ以上の事をする気配はなかった。

せつかく差し出されたのだし、と折りたたまれたコウモリの羽を広げた。すると、彼は満足したかのようにクルリと背を向けて去って行ってしまった。

「……………」

私は、彼の姿が見えなくなっても呆然と立ち尽くしていた。なんなのだろう、あの人は。

名前も素性も知れない怪しげな女に傘を渡して、返す当ても無いのにさっさとどっかにいつちゃって。カッコつけてるつもりなんだろうか、だとしたらバカ以外の何者でもない。柄に名前が書いてあるし、逆に無用心としか思えない。

本当に、なんなのだろう……。

私はいまだに握りしめているケータイを見つめた。開けてみると、びしょぬれになったにも関わらずちゃんと動いていた。最近のケータイはとてもタフだ、私なんかとは違って。

酸性の強い雨に濡れた私の手がケータイを操作する。次々と消えていくデータ。これをまた埋めていくのには結構な時間がかかる。けれども、埋め始めるのに時間はいらないうだ。

「サヨナラ」

最後に消すのは、いつも決まっている。アドレス帳のプロフィール。

そしてここに、私は新しい名前を刻み込んだ。知ったばかりのあのヒトの名前を。

この日から私は、彼　東雲香をつけまわし始めたのである。

一降り目〇偶然の出会い

翌朝。 ずぶ濡れの私と、 コウモリ傘の彼が衝撃的な出会いを果たした夜から、 わずか半日後。 私は運命というものを感じずにはいられなかった。

天気は昨夜とは打って変わっての快晴。 新しい恋が始まるとき、このパターンはよくあることなので気にはならない。

重要なのは、彼 東雲香の着ている制服である。 きちんとアイロンがけされた黒のスラックスに、一番上のホックまで閉められた学ラン。 昨日と同じコートをはおっていたが暖かいためか前は開いていて、校章入りのボタンがまる見えだった。

その校章が、私が在籍している高校のものなのである。

偶然出会った二人が通う学校が、同じだなんて…。

無言で渡された折りたたみ式のコウモリ傘。 この傘を返す事を口実に、ここで4時間粘ったかがあるというものだ。

私は、気付かれないようにそっと立ち去ることにした。 傘はまた後で返せばいい。 私たちの、学び舎で。

一降り目〇偶然の出会い

家に帰ると、玄関前で鍵を取り出した。 パパもママもすでに仕事へ行ってしまった時間なので、どうせ閉まっている。 ドアを開けるとほら、やっぱり薄暗い。

二人とも私の事はそんなに深刻に考えてない。 引きこもっていないだけでした、としか思っていない。 体面的に、不登校を気にしてはいるけれど、特に何かしらの手をつつわけでもなく、私はただ遠くから様子をうかがわれている。

ありがたい限りだ。 その方が私も動きやすい。

明かりも点けず、薄暗い中を2階へ上がる。 自分の部屋の前で、

鍵を取り出す。この部屋の鍵は私しか持っていない。

部屋の中は夜の内にスッキリと片付けた。壁一面に貼っていた写真も、声を録音したテープも、今頃きつとゴミ処理場だ。

電気をつけてクローゼットを開けた私は、舌打ちをする。あいつの趣味に合わせて買ってやった服を処分し忘れていた。こんなものはもう必要無いというのに。

しかし、今はそれを片付けている場合ではないのだ。邪魔くさい服の中から、目的とする一着を引っ張り出す。

しわくちゃになったそれは、長い間着てなかったセーラー服。正式に学校をやめる日までは、と捨てずに取っておいてよかった。今日からまた着る事になるのだから、一度クリーニングに出すべきだろう。

クリーニングが終わるまで、などと悠長なことはいってられない。私は久しぶりにセーラー服に着替え、自宅を後にした。

学校に着くと、授業はもう始まっていた。登校中の東雲香をみたあと一旦家に戻っているから、当然なのだが。

グラウンドでは、どこかのクラスがソフトボールをしていた。その真ん中を突っ切るわけにもいかないの、グルツと回りこんで、校舎へととことこ歩く。

…誰もいない下駄箱に、中央ロビー、階段、廊下。お喋りや教師の声、ドツといきなりわく笑い声。一つ一つに、なぜか、心がざわめく。

彼もこの中にいるのだ。この中の、どれかに。いったい、どこに…。

彼の声が聞こえないかと、耳をそばだてながら自分のクラスへ向かう。けれど、そううまくいくはずもなく、ついには二年A組の教室の前までたどり着いてしまった。

わずかな落胆を得た私は、先生の声が響き漏れるドアに手をかけた。

「それじゃあこの問題をー、誰にやってもらおうかなあ…」

記憶では確か、今は数学をしているはずだ。教室内では今まさに、先生が誰かを指名しようとしているらしい。

「えー、それじゃあ…東雲！」

ドアを開けると同時、真正面の教壇から聞こえた言葉に耳を疑う。

私はドアを開けた格好のまま、間抜けた顔で固まった。目の前では、教壇に手をついたまま私と同じように固まっている、爽やかに髪を刈り上げた男性がこちらに顔を向けていた。

しののめ、と彼は言わなかっただろうか。東雲　昨夜、出会った『彼』と同じ名字。

静寂に包まれる教室に、ガタンという音がして顔を向ける。そこに立っていたのは、背の高い男子。真つ黒な髪を爽やかに切りそろえ、吸い込まれそうなほどまっすぐな眼差しを正面に向け、学ランのホックまできっちり閉めた生徒だった。

「その問題の答えは…」

低めのよく響くその声は、昨夜のたった一言の台詞と共に、記憶しているものだった。背筋をまっすぐにしているその立ち姿は、雨の中でにじむ視界が捉えたものと変わらない。

「 $3X^2 + 2X + 4$ 、です。合ってますか、先生？」

こんな偶然があるのだろうか。確かに、今朝の時点で彼が同じ高校に通っているということは分かっていた。しかし、まさか、クラスまで同じだったとはさすがに予想外だ。

何か細工をしたわけでもなく、出会いすらたまたまだったというのに…。

「遠藤先生」

「えっ？ああ、なんだ？」

彼に名前を呼ばれ先生は我に返ったが、戸惑いを隠しきれず反応に窮している。

「答え、合ってますか？ $3X^2 + 2X + 4$ です」

「あ、ああ…正解だ。えー、今入ってきた生徒は…」

先生に何か言われる前に、私は自分の席を見つけ、スタスタと無言で向かった。とりあえず空っぽのまま持ってきた通学鞆を置き、席に着く。

「天木みつる。出席番号は22番です」

「に、22番の天木みつるか…。えー、それでは授業を、続ける。

あー、今説明したように」

教室中の生徒も先生も私をちらちらうかがっていた。今まで全く姿を見せなかった、いわゆる不登校少女がいきなり現れたのだから無理もない。だが私自身は、そんなことほとんど気にならなかった。それよりも、彼だ。眉一つ動かさず、真面目に授業を聞いている、東雲香。

もう一度言おう。こんな偶然があるのだろうか…。

(そんな馬鹿な…)

私の頭にようやく浮かんできた言葉は、これ一つだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4872s/>

酸性恋愛雨

2011年4月15日18時40分発行